

あなたはどちらの国に生きるのか 失われた者Ⅶ

「愛の結果 癒し（回復）が起こる」

ルカ13:10-17

■ これまでのシリーズを振り返ってみましょう

これまでのシリーズを振り返ってみましょう。

1. 生死観 生きている？
2. 息子として 親子関係
3. 行先 行きたいところ 行きたくないところ
4. 見えているもの 過去
5. 最善 良いほうを選ぶ
6. 収穫の源 彼の友として
7. 見ているものと足の土台
8. 悔いて改める実を結ぶこと
9. 天国の銀行 平安
10. 勿体ない 存在
11. 罪を認める力 赦す力

本来あるべき姿が失われていることが「勿体ない」ということ、そして悔いて改めることが失われているので、悔い改めの結果として実を結ぶことができないうことが語られてきました。前回のぶどうの木のとえ話を覚えていますか。葉は茂って大きくなった私たちの人生。けれど、なぜか実がならず、うまくいきません。それは、「自分は悪くない」「自分が正しい」という心が堅い根となり、その根ではいくら良いエネルギーが来たとしても吸収することができないからです。ぶどう園の主（神様）はこの木を切り倒そうかと提案しますが、管理者（イエス・キリスト）は根を掘ってみましょうと言いました。根を掘り、堅い根を切る時には痛みが伴いますが、柔らかい根（聞く耳）が出て良いエネルギーを吸収できるようになるなら、実を結ぶことができるのではないかとイエス様は言われたということです。今日は失われた物シリーズの最後です。

■ 18年病の霊につかれて腰が曲がっていた女性

病のすべてが霊的なものではありませんが、この女性に関してはイエス様はそのように言われました。私たちの内側には神様と繋がる霊があります。その外側に魂（知識・意思・感情）があり、その外側に肉体があります。私たちの肉体は魂に非常に影響を受けています。著者であるルカは医者なので、「骨がのびた」という言葉を選んで記述しています。「病は癒された」とイエス様が言われた時に癒され、手を置いた瞬間に腰が伸びたのだと記述しています。癒しが先に起こって、その次に腰が伸びたという記述になっています。これは、彼女の病はまさしく、心の内側に起こっていたことなのだと語っているのです。ですから、病的というよりは彼女の人生観に病が影響を与えていたという話です。過去の経験にさいなまれて体に影響を受けている女性は、もう自分は立つことはできないのだと信じていました。悪という存在がその人の人生を縛っているのです。今日の私たちの心も同じです。何年も前に言われた言葉によって立つことができないのです。悪魔は友達のような顔をして私たちの価値観に近づいてきて騙すのです。彼は裏切り者であり嘘つきですから人生の価値観に語りかけて立ち上がれないようにするのです。「お前はルールに違反したからもう不適格者で神もお前を必要ないと言っている。だからこの場所から出て行け。」と言ってきます。ですからこの女性もこの場所には来ていましたが18年もの間あきらめていたのです。腰とは信仰のことです。信仰が曲がって立ち上がれないということです。

私達も同じように騙されているのです。自分で勝手にルールを決めて、落第点をつけているのです。結果、選択は2つです。合格点をいくか、落第かです。悪魔は落第だと言い続けて来ます。けれど、「義人はひとりもない」と聖書には書かれています。

■ 会堂管理者…

会堂管理者はイエス様ではなく群衆を叱りました。それは、イエス様が正しいことを言い、行っておられるとわかって葛藤があったからです。けれど、素直にできなかったのです。自分は会堂管理者だと頑張っていました、その頑張りを証明するためにはルールがありました。けれど、イエス様はそのルールを超越し、病んでいる女性が治りました。会堂管理者はこのままでは多くのユダヤ人に示しつかないし、職責をまっとうしなければならぬ、けれど、イエス様に言う力もなく、全否定もできないと思ったのでしょう。「6日はいい」と無理のある回答をしました。これは、何が正しいかわかっていながら

ルールの方が大切になっていたということです。ルールを犯した人を指さすことで自分の正しさを証明することは、今日の日本も世界も同じです。これは愛ではありません。

■ 失われた最も重大なものは「愛」

これまでの11回の学び。生きること、行先、親子関係、見えているものが変わってしまい、最善が選べなくなり、収穫すら得られなくなり、見えているものの足の土台を失い、揺れる草のようにいつも揺らぎ、右往左往し、感情的に流されて、悔い改めることができない…。それは結局のところ、自分の罪を認めることができないからです。自らのために目の前に安心を少しでも積み上げることを願い、自分自身を失って勿体ない姿になって人を赦すことができなくなったのは愛し合う心がなくなったからです。アダムがエバに責任転嫁をして以来、私たち人間は隣人を愛することができなくなったので神様との関係を失いました。自分の大切な存在の失敗を神様に訴える時には、相手のせい、自分は悪くないとやってきたのです。

安息日を決めたのは神様であるイエス様ご自身です。ルールを見ている人には目の前に安息日を制定した人がいてもわからないのです。決めた本人なら「この日は安息日はやめた！」と言ってもいいわけです。愛とはそういうものなのです。愛というものには条件やルールはなく、やっていけない理由は何もないのです。神様は365日まどろむこともなく眠ることもありません。愛はどんな時も稼働中です。

愛はルールを変えられます。神様の愛に戻らなければなりません。私たちは、「自分は正しい」「自分はよくできている」と勝手に自分で合格点を設けますが、神様はそのようなものは設けていません。ただ、「キリストの似姿になりなさい。」と言われていただけです。つまり、愛する者になりなさいということだけです。そこに目を向けるなら、十字架がよくわかるようになります。イエス様は私達を愛するが故にルールを押し曲げ、天を押し曲げて暗闇を足の下にして、地上に降りて来られ、底辺の底辺、糞土にまみれた家畜小屋に生まれてくださいました。

私たちが結ぶ実とは評価ではありません。けれど、クリスチャンは特に陥りやすいのです。罪を犯している人、やるべきことをしない人に対して「おかしい！」と言って指さし、裁いてしまうのです。これが怖いことなのです。愛ではないからです。神様はこれを偽善者と言われるのです。神様は私たちが何かをするから喜ぶものではありません。愛かどうかです。失われた最も重大なものは「愛」です。これを取り戻さなければ神様のことはわかりません。けれど、私たち自身には取り戻す力はありません。なぜなら罪人だからです。ですから、イエス様は自ら十字架にかかれ、体を引き裂き、血を流し、私たちに言われました。「あなたのすべての失敗を私が背負う。私はあなたを赦す。だからあなたがたも赦し合い、愛し合いなさい。」

自分を愛していますか？最高傑作である自分をすべてをもって愛していますか？誰かに愛してほしいと願うよりも、自らを愛せるようにと願うのです。

■ 祈りましょう

神様、もう一度、真実の愛を私に返してください。

（要約者：全本みどり）

（2023年11月5日）